

歴史的環境の保存・活用における市民協働活動に関する考察 —集落遺跡における竪穴建物の自立的復元と継続的保存管理について—

明石工業高等専門学校専攻科 楯原 郁美
明石工業高等専門学校 建築学科 八木 雅夫

1. 研究の背景

文化庁の報告¹⁾によれば、国指定史跡の中で集落遺跡は230件あまりある。発掘された集落遺跡の多くは、指定史跡として整備され、地域の歴史的環境として保存・活用されている。具体的には、遺構面を保存し、竪穴建物を含む一部の建物や遺構を復元することにより整備されることが多い。

整備は公共事業として実施されており、展示・説明のための施設整備を重視する傾向が強い。本来、遺跡は地域の財であり、地域の人々が理解を深めながら保存・活用していくことが望ましい。ところが、地域にとって遺跡の整備は保護を第一義的に扱う公共事業のイメージが強く、保存・管理への市民参加が充分には実現できていないと考えられる。すなわち、行政が保護管理の役割を担っているのが現状であろう。

一方、文化庁の文化審議会文化財分科会企画調査会の報告²⁾によると、「社会全体で文化財を継承していくための方策」が挙げられており、文化財の保存・活用を住民参加型で担う必要性を示している。また、文化庁も一昨年度より文化財の維持・管理に参加する市民やボランティア団体または個人を「文化財サポーター」と位置づけ、把握作業やシンポジウム開催を進めつつある。

掘り起された集落遺跡は、地域住民によって保存・管理されることにより、地域の遺産として再認識され、地域の社会基盤を形成する方向を模索する必要があると考えられる。

2. 研究の目的と方法

本研究では、歴史的環境を構成する集落遺跡における自立的な整備方法と継続的保存・活用の現状と課題を明らかにする。また、竪穴建物が復元された集落遺跡との比較を通じて、文化財サポーター的な活動と考えられる保存・活用を实践する大中遺跡において検証を行う。

初めに、事例研究として、全国の代表的な竪穴建物が復元された集落遺跡について、現地調査や文献調査を行う。集落遺跡における竪穴建物の維持・管理方法の現状を把握し、集落遺跡の特徴と地域的特性を明らかとする。

次に、その経験の記録を通して大中遺跡において竪穴建物の復元を協働して実践し、市民参加型の自立的復元による集落遺跡の整備方法について考察する。

なお、自立的な整備方法（自立的復元）とは、大工や茅葺職人など専門業者による復元ではなく、市民参加のみで試行錯誤しながら復元することと考えた。

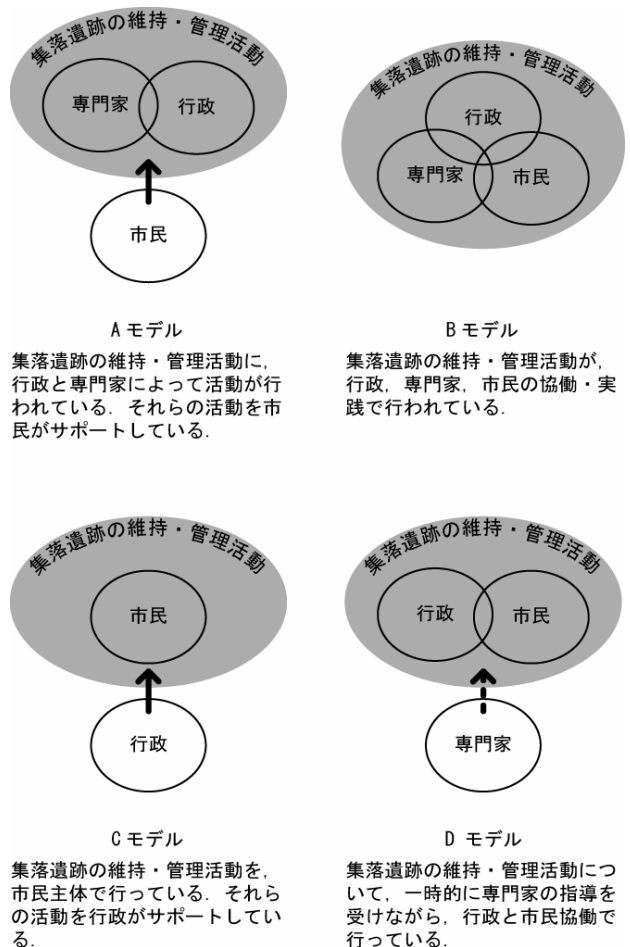
3. 集落遺跡の整備事例

青森県三内丸山遺跡、岩手県御所野遺跡、鳥取県妻木晩田遺跡、島根県田和山遺跡の4つの遺跡の現地調査を行い、保存・活用における市民参加の現状について考察する。

集落遺跡において、住民や市民が担うことのできる作業内容として、遺跡ガイド、展示体験イベントの補助活動、竪穴建物の復元活動（専門家と共同、自立的復元の2つに分類する）、史跡内の清掃活動、以上4つに分類できる。それらを踏まえた上で考察を行う。

3・1 青森県三内丸山遺跡の保存・管理における市民参加状況

縄文時代の拠点集落跡である三内丸山遺跡³⁾は、縄文時代前期の大集落跡や平安時代の集落跡、中世末の城館跡の一部が発見されている。縄文時代の人々の生活を具



図—1 市民が参加する集落遺跡の維持・管理活動に関する活動モデル図

表—1 史跡の保存・活用活動への市民参加状況

遺跡名	展示・説明の施設の有無	遺跡ガイド	竪穴建物の復元活動		清掃活動	体験イベントの補助活動	モデル
			専門家と共同	自立的復元			
青森県 三内丸山遺跡	○	○	×	×	×	×	A
岩手県 御所野遺跡	○	○	○	×	○	○	B
鳥取県 妻木晩田遺跡	○	○	×	×	×	×	A
島根県 田和山遺跡	×	○	×	×	×	○	C
兵庫県 大中遺跡	○	○	×	○	○	○	D

体的に知ることができる貴重な遺跡として、2000年に国の特別史跡に指定された。青森県では、縄文時代の「むら」を体感できる公園として整備が進められており、茅葺、樹皮葺、土葺など多種類の竪穴建物の復元や、大型掘立柱建物跡の復元が行われている。

市民参加の状況として、遺跡ガイド活動が主体となって文化財をサポートしている。体験イベントの補助活動や、竪穴建物の復元活動には参加している様子はなく、専門業者によって維持・管理活動が行われている。(図—1 Aモデル)

3・2 岩手県御所野遺跡の保存・管理における市民参加状況

縄文時代中期後半の大規模なむらの跡である御所野遺跡⁴⁾は、台地のほぼ全面に600棟以上の竪穴住居跡が発見されている。縄文時代の社会構造を知る上で貴重な遺跡として、1993年に国指定史跡に指定された。また、全国で初めて土葺き建物を復元した珍しい集落遺跡である。

市民参加の状況は、遺跡ガイド、清掃活動、竪穴建物復元活動、イベント補助活動など幅広い分野に渡り、多くの市民が文化財サポーターとして維持・管理活動に関わっている。具体的な整備として、市民が中心となって、地域の材を使用しながら専門業者と協働で復元活動を行っている。(図—1 Bモデル)

3・3 鳥取県妻木晩田遺跡の保存・管理における市民参加状況

弥生時代中期末から古墳時代前期の大山山麓に存在したクニの中心的大集落である妻木晩田遺跡⁵⁾は、竪穴住居跡420棟以上、掘立柱建物跡500棟以上などが発見されている。弥生時代の国を知る上で貴重な遺跡として、1999年に国指定史跡に指定された。

市民参加の状況は、遺跡ガイドが中心でその他イベント補助活動を文化財サポーターとして行っている。具体的な整備は、行政と専門業者によって行われている。(図—1 Aモデル)

3・4 島根県田和山遺跡の保存・管理における市民参加状況

弥生時代の一般的な環濠集落とは形態が異なる妻木晩

田遺跡⁶⁾は、環濠の内側には狭隘な丘と倉のような建物等があるだけで、竪穴式住居は全くなく日常的に人の住んでいた形跡がない珍しい遺跡である。2001年度に国指定史跡に指定された。

松江市教育委員会が開催した「史跡田和山遺跡の整備と活用を考える市民ワークショップ」の参加者を母体に、2003年、文化財サポーターの団体である田和山サポートクラブが発足した。遺跡ガイド、イベント補助活動、小修理活動など幅広く様々な活動が実施されている。復元そのものは市民参加型ではないが、維持・管理活動に参加している。(図—1 Cモデル)

3・5 保護・管理における市民協働の現状

本章では、以下のことを明らかにした。

(1) 説明や案内のみについて市民が参加している実態は多くみられるが、維持・管理活動に参加している事例は少ない。

(2) 御所野遺跡、田和山遺跡では、地域住民が文化財サポーターとして集落遺跡の維持・管理活動に積極的に参加していた。

(3) 地域住民からなる文化財サポーターが主体となった整備を行っている事例として御所野遺跡が挙げられ、地域の材を使用し、専門業者を交えながら市民協働によって竪穴住居等の復元が行われている。

市民主体の維持・管理活動や復元活動などの整備を行っている事例は非常に少なく、整備に関しては行政が行っている。法的責任は行政にあるので、団体としてどのように参画するか、どのような方法で整備するか等、整備の参加のあり方を検討する必要がある。

4. 大中遺跡における復元の実践

4・1 大中遺跡の歴史と現状

兵庫県加古郡播磨町にある大中遺跡³⁾は、弥生時代後期の密集型集落遺跡である。弥生時代の後期のごく短期間に営まれた集落で、住居跡の数と種類の多様性に富むことが特徴的な集落遺跡として、1967年に国指定史跡に指定された。

現在、緑豊かな史跡公園「播磨大中国古代の村」として

市民に開放されており、公園内には5棟の竪穴建物を復元、1棟の遺構面を残す展示がされている。集落遺跡としてだけでなく、公園として住民の散歩やランニングコースとなっており、地域の憩いの空間となっている。

また、史跡敷地南側に環境との調和をはかった「環境融合型博物館」として、2007年10月に兵庫県立考古博物館が開館した。参加体験型・ネットワーク型の博物館として、開館以降来場者数も多く、歴史を学ぶ場として広く知られる存在である。

4・2 竪穴住居復元プロジェクト概要

兵庫県立考古博物館では、開館以降「播磨大中国古代の村」を目指し史跡大中遺跡の環境整備・公開・管理を行っている。具体的には、2008年度4月から「竪穴住居復元プロジェクト」が開始された。

このプロジェクトは、竪穴住居の復元整備にあたって、従来型のハード中心の整備ではなく、県民参加型の取り

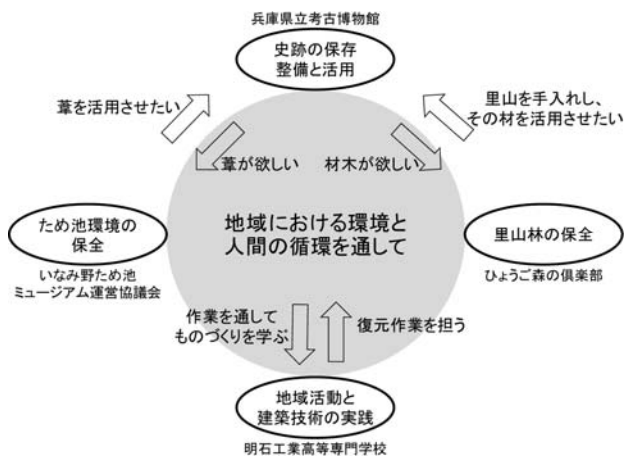


図-2 竪穴住居復元プロジェクト関係図

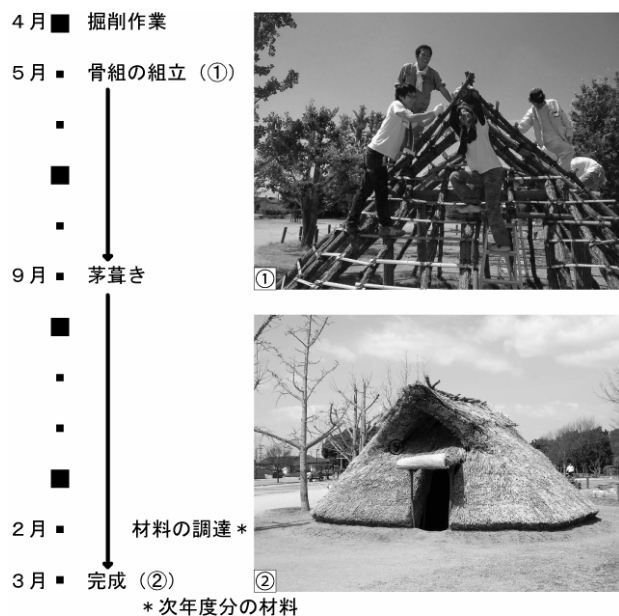


図-3 竪穴住居復元プロジェクト年間スケジュール

組みによるソフト面を重視した事業である。いなみ野ため池ミュージアム運営協議会の「ため池環境の保全活動」、ひょうご森の倶楽部の「里山林の保全活動」、兵庫県立考古博物館と考古学倶楽部の「史跡の保存整備と活用」、国立明石工業高等専門学校(以下、明石高専)の「地域活動と建築技術の実践」というそれぞれの取り組みが連携し、協働しながら大中遺跡において竪穴建物の実践的復元を行っている。(図-2)⁷⁾

月に2回、材木の伐採・輸送、葦刈りなどの材料の調達や、架構の組み上げ、葦葺きなどを協働で行っている(図-3)。完成後は、歴史学習や古代体験活動の場や、それぞれの取り組みを紹介する場として活用・管理を継続して行う予定となっている。

4・3 竪穴住居復元プロジェクト2008

2008年度、復元した竪穴建物は、4本柱の隅丸方形竪穴建物を復元した15~70歳のボランティア約80名が参加し、1日4時間、延33日(うち3回、前年度作業)で完成した。10月には兵庫県知事との「さわやかトーク」に参加、2009年3月29日に竪穴住居完成式イベント等が行われ、県立考古学博物館の来場者数は通常の土日の約2倍にもなった。

4・4 アンケート調査結果

2008年度の竪穴住居復元プロジェクトに参加した明石高専の学生に対し、2009年4月にアンケート調査を行った。参加者35名に対し、回答者は19人、回答率は54%であった。アンケートの結果の一部を示す。(1)、(3)、(4)は記述回答、(2)は骨組作業、茅葺き作業、茅刈作業、木の伐り出し作業の4つの選択回答で、複数回答とした。

(1) 参加した理由について

参加者の多くは、先生の紹介で活動を知り、竪穴住居を建てるということに興味を持ったという理由が多かった。また、5月からの活動以前の事前活動(木の伐り出し、掘削作業)で興味を持ったという回答が得られた。

(2) 興味をもって取り組めた作業内容について

図-4にアンケートの回答結果を示す。最も興味をもって取り組んだ作業は、茅葺き作業という回答を得た。骨組作業は約3カ月、茅葺き作業は約5カ月と長期間作業

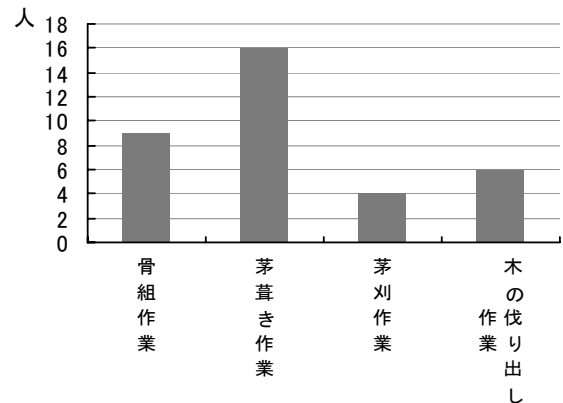


図-4 興味をもって取り組めた作業内容

を行っているのに対し、茅刈作業、材木の木の伐り出し作業は1日の作業である。そのため、全ての作業に参加できなかった学生は、骨組作業、茅葺き作業に回答する傾向があったことが、回答の偏りの原因と考える。

(3) 堅穴住居復元の今後の改善点について

作業する曜日の設定の変更や、作業内容・手順・分担の徹底化、また参加者の増加等の回答が得られた。復元の面で、現代の技術ではなく、弥生時代の道具を使用して復元するといった意見や、また茅の管理方法が問題であるという回答もあった。

(4) 継続して参加できなくなる原因について

日程の設定が学生の他の活動(部活動等)と重なり、参加出来ないという回答があった。また、参加出来ない状況が続くと、作業内容や状況がわからなくなってしまい、参加し難くなってしまおうという回答が得られた。

(5) 感想

- ・ 普段できない経験が出来てよい経験になったと思う。
- ・ いろいろな人たちと交流ができて良かったと思う。
また、昔の人々の住居が少し学べた。
- ・ 目の前で(堅穴住居が)出来上がっていくのは、やはり嬉しかった。

4・5 ヒアリング調査結果

プロジェクトの参加者のうち、明石高専の学生以外のボランティア参加者に対して、ヒアリング調査を行った。その結果の一部を以下に示す。

(1) 考古学者も協働で作業を行うことにより、考古学的に堅穴建物復元の実証的分析が可能になった。

(2) 地域住民の中で、散歩などで大中遺跡公園に立ち寄る住民も多い。そのため、堅穴建物の復元作業の進行状況や、復元方法に興味を持つ住民が多かった。

(3) 復元作業だけではなく、古代のむらを体験できるイベントを企画したい。

4・6 アンケート・ヒアリング調査の考察

上記で示したアンケート、ヒアリング調査の考察を行う。参加者全員に対して、作業に興味をもって参加し、楽しく作業した人が大半であった。

一方、作業効率がよくないとの回答もあった。大中遺跡での自立的復元は初めての取り組みであるため、作業内容が明確ではなく、相談を重ねながら作業となる。よって、こういった回答を得たと考える。しかし、自立的復元だけが目的ではなく、作業を通じて、他世代の交流や環境活動に対する取り組みを市民協働で行っていくことが目的であり、作業内容を全員で考える事も重要である。それらの目的意識が学生内で不足していると考えられる。

4・7 まとめ

本章では以下のことを明らかにした。

(1) 一時的な専門家の指導等は必要であるが、ボランティアのみによる堅穴建物の自立的復元は可能である。

(2) 作業に参加するきっかけが、参加者声のかけによるものが多い。活動参加者の幅を広げるため、インター

ネット等で情報提供を行う必要があると考える。

(3) 回数を重ねるごとに学生の参加者人数が減少しており、学生だけではなく、活動の幅を広げる必要がある。また、1年間の事業であるため、継続して参加するような工夫が必要である。古代のムラ公園である特徴を生かしたイベント等を企画する必要があると考える。

(4) 学生の入替わりがあることや、大工や茅葺き職人不在のプロジェクトであるため、今後の自立的復元のための作業マニュアル等の作成が必要である。

以上より、堅穴建物を主とする集落遺跡に関して、市民協働で整備活動を行うことが可能であることが実証された。しかし、それらを継続的に行うための人材の確保や、技術の伝達が必要であると考えられる。

5. 結論

自立的な整備方法は、代表的な例として御所野遺跡が成果を上げている。また、大中遺跡でも市民協働参加型による整備が行われ、2008年度堅穴住居復元プロジェクトの成果によって可能であることが立証されたと考えられる。

しかし、継続的保存・活用においては行政主体で行われていることがほとんどであり、文化財サポーターといった市民が育成されていないのが現状である。自立的な整備を行っている集落遺跡の事例を生かすと共に、保存・活用を行う人材の確保や組織づくりを行う必要があると考える。

今後は、大中遺跡の第2期目の遺跡の整備活動に対して引き続き考察を行い、第1期目と比較すると共に、他の堅穴建物の集落遺跡における史跡の整備方法について調査、検討する。また、集落遺跡の整備方法と継続的維持・管理方法について検討する必要があると考える。

歴史的環境をもつ集落遺跡が地域住民の憩いの空間であると共に、地域の遺産として地域の人々によって守られ、伝えていくべきだと考える。

(1) 本研究は平成20、21年度文部科学省学生支援GP「ソーシャルマーケットを利用した学生の育成」に基づく研究成果の一部である。

参考資料

- 1) 文化庁 文化財 国指定史跡 データベース, 2009.4.30 取得, <http://www.bunka.go.jp/bsys/>
- 2) 文化審議会 文化財分科会 企画調査会: 文化審議会文化財分科会企画調査会報告書, 2008.10.30
- 3) 特別史跡 三内丸山遺跡, 日本語, <http://sannaimaruyama.pref.aomori.jp/index.html>, 2009.6.10 取得
- 4) 国史跡 御所野遺跡 御所野縄文公園, 日本語, <http://www.town.ichinohe.iwate.jp/goshono/>, 2009.6.10 取得
- 5) 鳥取県公式サイト, トリネット, 妻木晩田遺跡, 日本語, <http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=41862>, 2009.6.10 取得
- 6) 田和山史跡公園, 日本語, http://www.city.matsue.shimane.jp/jumin/bunka/bunka/bunkazai/tawayama_park/index.htm, 2009.6.10 取得
- 7) 兵庫県立考古学博物館, 日本語, <http://www.hyogo-koukohaku.jp/>, 2009.6.10 取得
- 8) 堅穴住居復元プロジェクト実施計画書, 2008.4